関西自然保護機構会報 18(2)：219－220，1996

淀　　川

京都大学大学院人間・環境学研究科　岡　田　美恵子

MY YODO RIVER

Mieko OKADA　*Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University.*

淀川が私のフィールドであるが，ゴミの多さに辟易している。ヨシの根元にひっかかっているゴミの多くは，公園や道路のゴミとはやや趣を異にする。エアコン，スクーター，タンス，フトンなど大きなゴミが多いのである。また，どきりとしたものには，マネキンの首や念仏の書かれた経木の散乱（精霊流しか？）が挙げられる。いずれ人も拾うのではないかと思っている。

そして，とうとう拾ってしまった。去年の七月に目もあいていない仔犬を見つけたのである。夏の河原の暑さをご存じだろうか。季節のいい時期には，犬の散歩やジョギングを楽しむ人も見られるが，真夏の午前十時ともなれば人影はほとんどない。おそらく夜までには，ヒメガマの生える水たまりにぐったりと横たわっている仔犬の命はないであろうことはたやすく想像できた。ガマの穂色をし，ガマの穂のような手ざわりの仔犬だった。暑さでぼんやりしていたせいもあるが，何も考えずに京都まで連れ帰った。途中，電車の中で仔犬は何度か悲鳴をあげた（あとでわかったのだが尿がかなり張っていて苦しかったようだ）。また，肌が触れていないと人間の赤ん坊のように泣くので，ずっと抱いていなければならなかった。捨てられたのは前日の夜のようだったが，常に触れあっていた親や兄弟から離され，よほど不安な思いをしたのではないかと思われる。

捨て犬といえば，ダンボールの空き箱に古タオルに包まれてというのが相場であろうが，この仔犬は道端にほうりなげられたアキカンのように，無造作に捨てられていた。捨てた人物はおそらく，犬を文字通りゴミとして捨てたのではなかろうか。八幡市のかわきた自然運動公園にもペットを河原に捨てるなという看板が最近立てられていた。友人の愛犬も聞けば，加古川を流れていたのを拾われたのだという。淀川に限らず河原はどこも似たようなものなのだろう。

捨てる神あれば拾う神ありというが，拾うのはともかく捨てるのがなぜ神なのかが合点がいかない。この諺の神様はずいぶんと人間臭い神様なのであろうか。神という字をともに人に変えれば理解はずっとたやすくなった。幸い私が拾った仔犬も，多くのかたの手を借りて，二週間後，小学校一年生の男の子のいる家庭に貰われていった。麦わら帽子にすっぽり入るほどの大きさだったのが，その頃には二まわりほど大きくなり目も開いていた。しばらくして，カービーと名付けてもらったことを知った。なんでも，「星の子カービー」というファミコン・ゲームのキャラクターの名前だそうである。こうして捨て犬はお星様の子になった。

環境にやさしくという言葉が氾濫しているが，やさしさ云々の前に想像力が必要なのではないかと思う。淀川にゴミと捨て犬は似合わない。淀川に似つかわしいものを，淀川の恩恵を受けている

一人一人がより多く思い付き，それにふさわしい行動がとれたとき，私たちは淀川にやさしくなったと言えるのではなかろうか。

九月の終わり，大阪市立自然史博物館の観察会が淀川の河口で行われた。新淀川大橋周辺は淀川では最大規模の干潟が広がり，また旧中津川と流路が重なる地域でもある。引き潮の間，子供たちの歓声がひびいた干潟は，満潮とともに野鳥たちに返された。岸辺から見るサギやシギが餌をついばみあるく様子が，秋のやわらかな日差しに映えて美しかった。ヨシ原が覆い隠してはいるが，観察会の一日を通じて私たちはそこにウラギクのしおん色やメダカの光るウロコ，ハゼたちの怒ったような顔を思い浮かべ，カニたちの気配を感じることができるようになっていた。

万葉集において難波すなわち大阪を詠みこんだ歌は三十四首あり，その多くが淀川の河口に結び付いたものである（高橋 1992）。改めて読み返すと「難波潟潮干の波」，「小江に蘆作り隠りて居る葦蟹」，「堀江の葦辺」という表現が立体感をもって迫ってくる。千年を隔てても，歌の風景と現実の風景が共通するというのは希有なことではなかろうか。しかし，これらの歌を詠んだ人々が今の淀川を見たとき，どういう感想を持つのだろうか。川を押さえ込み洪水をなくし，大きな都をつくったと誉めるだけであろうか。今，私はこれらの歌から伝わる万葉人の眼差しに，まっすぐ向き合うことができない。環境という言葉は，単に私たちの周辺の様子を示したものから，私たちの生存を保証している場所という意味へと変化している。この視点から淀川という環境を見つめるとき，私たちは淀川に対して万葉人とは異なる新たな表現を付け加えることができるはずなのだが。

引用文献

高橋良雄．1992．難波の葦．歌枕の研究，68－85．武蔵野書院，東京．